

將軍

芥川龍之介

青空文庫

一 白礮隊

明治三十七年十一月二十六日の未明だった。第×師団第×聯隊の白礮隊は、松樹^{しょうじ}山^{ゆざん}の補備砲台^{ほびほうだい}を奪取するために、九十三高地^{くじゅうさんこうち}の北麓^{ほくろく}を出発した。

路^{みち}は山陰^{やまかげ}に沿うていたから、隊形も今日は特別に、四列側面の行進だった。その草も^{うすやみ}ない薄闇^{うすやみ}の路に、銃身を並べた一隊の兵が、白礮^{しろだすき}ばかり仄^{ほのめ}かせながら、静かに靴^{くつ}を鳴らして行くのは、悲壮な光景に違いなかった。現に指揮官のM大尉なぞは、この隊の先頭に立つた時から、別人のように口数^{くちかず}の少い、沈んだ顔色^{かおいろ}をしているのだった。が、兵は皆思いのほか、平生の元気を失わなかった。それは一つには日本魂^{やまとだまし}の力、二つには酒の力だった。

しばらく行進を続けた後^{のち}、隊は石の多い山陰^{やまかげ}から、風当りの強い河原^{かわら}へ出た。

「おい、後^{うしろ}を見ろ。」

紙屋^{しりや}だったと云う田口^{たぐち}一等卒^{いっとうそつ}は、同じ中隊から選抜された、これは大工^{だいこう}だったと云う、堀尾^{ほりお}一等卒に話しかけた。

な勿^{もつ}体^{たい}をつけやがるだろう。だがそんな事は嘘^{うそ}つ八^{ぱち}だ。なあ、兄弟。そうじゃねえか？」

堀尾一等卒にこう云われたのは、これも同じ中隊にいた、小学校の教師^{きょうし}だったと云う、おとなしい江木上等兵^{えぎじょうとうへい}だった。が、そのおとなしい上等兵が、この時だけはどうか云うわけか、急に噛^かみつきそうな権幕^{けんまく}を見せた。そうして酒臭^{さけくさ}い相手の顔へ、悪辣^{あくらつ}な返答を抛^{ほう}りつけた。

「莫迦野郎^{ばかやろう}！ おれたちは死ぬのが役目じゃないか？」

その時もう白櫓隊は、河原の向うへ上つていた。そこには泥を塗^ぬり固めた、支那人の民家が七八軒、ひっそりと暁^{あかつき}を迎えている、——その家々の屋根の上には、石油色に襷^{ひだ}をなぞつた、寒い茶褐色の松樹^{しょうじゅ}山^{さん}が、目の前に迫つて見えるのだった。隊はこの村を離^はれようと、四列側面の隊形を解いた。のみならずいずれも武装したまま、幾条かの交通路に腹^{はら}這^はいながら、じりじり敵前へ向う事になった。

勿^{もちろん}論^{えぎ}江木上等兵も、その中に四つ這^{ほりお}いを続けて行つた。「酒保の酒を一合買うのでも、敬礼だけでは売りはしめえ。」——そう云う堀尾一等卒の言葉は、同時にまた彼の腹の底だった。しかし口数の少い彼は、じつとその考えを持ちこたえていた。それだけに、一層戦友の言葉は、ちようど傷痕^{きずあと}にでも触^ふれられたような、腹立たしい悲しみを与えたのだ

つた。彼は凍えついた交通路を、獣のように這い続けながら、戦争と云う事を考えたり、死と云う事を考えたりした。が、そう云う考えからは、寸毫の光明も得られなかった。死は×××××にしても、所詮は呪うべき怪物だった。戦争は、——彼はほとんど戦争は、罪惡と云う気さえしなかつた。罪惡は戦争に比べると、個人の情熱に根ざしているだけ、××××××××出来る点があつた。しかし××××××××××××××××××ほかならなかつた。しかも彼は、——いや、彼ばかりでもない。各師団から選抜された、二千人余りの白襷隊は、その大なる××××にも、厭でも死ななければならぬのだつた。……

「来た。来た。お前はどこの聯隊だ？」

江木上等兵はあたりを見た。隊はいつか松樹山の麓の、集合地へ着いているのだった。そこにはもうカアキイ服に、古めかしい襷をたすきあやどった、各師団の兵が集まっている、――彼に声をかけたのも、そう云う連中の一人だった。その兵は石に腰をかけながら、うつすり流れ出した朝日の光に、片頬の面砲をつぶしていた。

「第×聯隊だ。」

「パン聯隊だな。」

江木上等兵は暗い顔をしたまま、何ともその冗談じようだんに答えなかった。

何時間かの後、この歩兵陣地の上には、もう彼^ひ我的^が砲彈が、凄まじい唸^{うな}りを飛ばせていた。目の前に聳えた松樹山の山腹にも、李家屯^{りかどん}の我海軍砲は、幾たびか黄色い土煙^{つちけむり}を揚げた。その土煙の舞い上^{あが}る合間^{あいま}に、薄紫の光が迸^{ほどばし}るのも、昼だけに、一層悲壮だった。しかし二千人の白^{しろ}襷^{だすき}隊^{たい}は、こう云う砲撃の中に機^きを待ちながら、やはり平生の元気を失わなかった。また恐怖に挫^{ひし}がれないためには、出来るだけ陽気に振舞^{ふるま}うほか、仕様のな事も事実だった。

「べらぼうに撃ちやがるな。」

堀尾一等卒は空を見上げた。その拍子^{ひょうし}に長い叫び声が、もう一度頭上の空気を裂^さいた。彼は思わず首を縮^{ちぢ}めながら、砂埃^{すなほこり}の立つのを避けるためか、手巾^{ハンカチ}に鼻を掩^{おお}っていた、田口一等卒に声をかけた。

「今のは二十八^{にじゅうはつ}珊^{サンチ}だぜ。」

田口一等卒は笑って見せた。そうして相手が気のつかないように、そつとポケットへ手巾^{ハンカチ}をおさめた。それは彼が出征する時、馴染^{なじみ}の芸者に貰^{もら}って来た、縁^{ふち}に繡^{ぬい}のある手巾^{ハンカチ}だった。

「音が違うな、二十八^{サンチ}珊^チは。――」

田口一等卒はこう云うと、狼^{ろうばい}狽^{たい}したように姿勢を正した。同時に大^{おお}勢^{ぜい}の兵たちも、声のない号^{ごう}令^{れい}でもかかったように、次から次へと立ち直り始めた。それはこの時彼等の間へ、軍司令官のN將軍が、何人かの幕^{ばく}僚^{りょう}を従えながら、嚴然と歩いて来たからだ。た。

「こら、騒いではないかん。騒ぐではない。」

將軍は陣地を見渡しながら、やや鏑^{さび}のある声を伝えた。

「こう云う狭^き隘^{やうあい}な所だから、敬礼も何もせなくとも好^よい。お前達は何聯隊の白^{しろ}襷^{だすきた}隊^いじゃ？」

田口一等卒は將軍の眼が、彼の顔へじつと注がれるのを感じた。その眼はほとんど処女のように、彼をはにかませるのに足るものだった。

「はい。歩兵第×聯隊であります。」

「そうか。大^{おお}元^{げん}氣^きにやってくれ。」

將軍は彼の手を握った。それから堀^{ほり}尾^お一等卒へ、じろりとその眼を転ずると、やはり右手をさし伸^のべながら、もう一度同じ事を繰^{くり}返^{かえ}した。

「お前も大元氣にやってくれ。」

こう云われた堀尾一等卒は、全身の筋肉が硬化したように、直立不動の姿勢になった。幅の広い肩、大きな手、頬骨の高い赭ら顔。——そう云う彼の特色は、少くともこの老將軍には、帝国軍人の模範らしい、好印象を与えた容子だった。將軍はそこに立ち止まったまま、熱心になお話し続けた。

「今打っている砲台があるな。今夜お前たちはあの砲台を、こっちの物にしてしまうのじや。そうすると予備隊は、お前たちの行った跡から、あの界隈の砲台をみんな手に入れてしまうのじや。何でも一遍にあの砲台へ、飛びつく心にならなければいかん。——」

そう云う内に將軍の声には、いつか多少戯曲的な、感激の調子がいって来た。

「好いか？ 決して途中に立ち止まって、射撃などをするじやないぞ。五尺の体を砲弾だと思つて、いきなりあれへ飛びこむのじや、頼んだぞ。どうか、しっかりやってくれ。」將軍は「しっかり」の意味を伝えるように、堀尾一等卒の手を握った。そうしてそこを通り過ぎた。

「嬉しくもねえな。——」

堀尾一等卒は狡猾そうに、將軍の跡を見送りながら、田口一等卒へ目交せをした。

「え、おい。あんな爺さんに手を握られたのじや。」

田口一等卒は苦笑くしやうした。それを見るとどう云う訣わけか、堀尾一等卒の心うちの中には、何かに済まない気が起った。と同時に相手の苦笑が、面憎つらにくいような心もちにもなった。そこへ江木上等兵えぎが、突然横合いから声をかけた。

「どうだい、握手で××××のは？」

「いけねえ。いけねえ。人真似をしちや。」

今度は堀尾一等卒が、苦笑せずにはいられなかった。

「××れると思うから腹が立つのだ。おれは捨ててやると思っている。」

江木上等兵がこう云うと、田口一等卒も口を出した。

「そうだ。みんな御国おくにのために捨てる命だ。」

「おれは何のためだか知らないが、ただ捨ててやるつもりなのだ。××××××××でも向けられて見る。何でも持つて行けと云う気になるだろう。」

江木上等兵の眉まゆの間あいだには、薄暗い興奮が動いていた。

「ちようどあんな心もちだ。強盗は金さえ巻き上げれば、××××××××云いはしまい。が、おれたちはどっち道死みちぬのだ。××××××××××××××××××××××××たのだ。どうせ死なずにすまないのなら、綺麗きれいに××××××××やった方が好いじゃないか？」

こう云う言葉を聞いている内に、まだ酒氣が消えていない、堀尾一等卒の眼の中には、この温厚な戦友に対する、侮蔑の光が加わつて来た。「何だ、命を捨てるくらい？」——彼は内心そう思いながら、うつとり空へ眼をあげた。そうして今夜は人後に落ちず、將軍の握手に報いるため、肉弾になろうと決心した。……

その夜の八時何分か過ぎ、手擲弾に中つた江木上等兵は、全身黒焦になつたまま、松樹山の山腹に倒れていた。そこへ白襷の兵が一人、何か切れ切れに叫びながら、鉄条網の中を走つて来た。彼は戦友の屍骸を見ると、その胸に片足かけるが早いのか、突然大声に笑い出した。大声に、——實際その哄笑の声は、烈しい敵味方の銃火の中に、気味の悪い反響を喚び起した。

「万歳！ 日本万歳！ 悪魔降伏。怨敵退散。第×聯隊万歳！ 万歳！ 万々歳！」
彼は片手に銃を振り振り、彼の目の前に闇を破つた、手擲弾の爆発にも頓着せず、続けざまにこう絶叫していた。その光に透かして見れば、これは頭部銃創のために、突撃の最中発狂したらしい、堀尾一等卒その人だった。

明治三十八年三月五日の午前、当時全勝集に駐屯していた、A騎兵旅団の参謀は、薄暗い司令部の一室に、二人の支那人を取り調べて居た。彼等は間牒の嫌疑のため、臨時この旅団に加わっていた、第×聯隊の歩哨の一人に、今し方捉えられて来たのだった。

この棟の低い支那家の中には、勿論今日も坎の火つ氣が、快い温みを漂わせていた。が、物悲しい戦争の空気は、敷瓦に触れる拍車の音にも、卓の上に脱いだ外套の色にも、至る所に窺われるのであった。殊に紅唐紙の聯を貼った、埃臭い白壁の上に、束髪に結った芸者の写真が、ちゃんと鋏で止めてあるのは、滑稽でもあれば悲惨でもあった。そこには旅団参謀のほかにも、副官が一人、通訳が一人、二人の支那人を囲んでいた。支那人は通訳の質問通り、何でも明瞭に返事をした。のみならずやや年嵩らしい、顔に短い髭のある男は、通訳がまだ尋ねない事さえ、進んで説明する風があった。が、その答弁は参謀の心に、明瞭ならば明瞭なだけ、一層彼等を間牒にしたい、反感に似たものを与えるらしかった。

「おい歩兵！」

旅団参謀は鼻声に、この支那人を捉えて来た、戸口にいる歩哨を喚びかけた。歩兵、——それは白襷隊しろだすたいに加わっていた、田口一等卒たぐちいつとうそつにほかならなかった。——彼は戸の正字格子まじょうこうしを後に、芸者の写真へ目をやっていたが、参謀の声に驚かされると、思い切り大きい答をした。

「はい。」

「お前だな、こいつらを掴まえたのは？ 掴まえた時どんなだったか？」

人の好い田口一等卒は、朗読的にしゃべり出した。

「私が歩哨わたくしほしやうに立っていたのは、この村の土堀どべいの北端、奉天ほうてんに通ずる街道かいどうであります。その支那人は二人とも、奉天の方向から歩いて来ました。すると木の上の中隊長が、——」

「何、木の上の中隊長？」

参謀はちよいと目蓋まぶたを挙げた。

「はい。中隊長は展望てんぼうのため、木の上に登っていられたのであります。——その中隊長が木の上から、掴まえろと私に命令されました。」

「ところが私が捉えようとする、そちらの男が、——はい。その髯のない男であります。その男が急に逃げようしました。……」

「それだけか？」

「はい。それだけです。」

「よし。」

旅団参謀は血肥りちぶとの顔に、多少の失望を浮べたまま、通訳に質問の意を伝えた。通訳は退屈たいくつを露さあらわないため、わざと声に力を入れた。

「間牒なげでなければ何故逃げたか？」

「それは逃げるのが当然です。何しろいきなり日本兵が、躍りおどかかってきたのですから。」
もう一人の支那人、——鴉片あへんの中毒に罹かかっているらしい、鉛色の皮膚ひふをした男は、少しも怯ひるまずに返答した。

「しかしお前たちが通つて来たのは、今にも戦場になる街道かいどうじゃないか？ 良民ならば用もないのに、——」

支那語の出来る副官は、血色の悪い支那人の顔へ、ちらりと意地の悪い眼を送った。

「いや、用はあるのです。今も申し上げた通り、私たちわたくしは新民屯しんみんとんへ、紙幣しへいを取り換えに出かけて来たのです。御覧下さい。ここに紙幣もあります。」

髯ひげのある男は平然と、将校たちの顔を眺め廻した。参謀はちよいと鼻を鳴らした。彼は

副官のたじろいだのが、内心好い気味に思われたのだ。……

「紙幣を取り換える？ 命がけでか？」

副官は負惜みの冷笑を洩らした。

「とにかく裸にして見よう。」

参謀の言葉が通訳されると、彼等はやはり悪びれずに、早速赤裸あかはだかになって見せた。

「まだ腹巻はらまきをしているじゃないか？ それをこつちへとつて見せろ。」

通訳が腹巻を受けとる時、その白木綿しろもめんに体温のあるのが、何だか不潔に感じられた。

腹巻の中には三寸ばかりの、太い針がはいつていた。旅団参謀は窓明りに、何度もその針をしら検べて見た。が、それも平たい頭に、梅花ばいかの模様がついているほか、何も変った所はなかった。

「何か、これは？」

「私わたくしは鍼医はりいです。」

髯のある男はためらわずに、悠然と参謀の問に答えた。

「次手ついでに靴くつも脱ぬいで見ろ。」

彼等はほとんど無表情に、隠すべき所も隠そうとせず、検査の結果を眺めていた。が、

ズボンや上着は勿論、靴や靴下を検べて見ても、証拠になる品は見当らなかった。この上は靴を壊こわして見るよりほかはない。——そう思った副官は、参謀にその旨を話そうとした。その時突然次の部屋から、軍司令官を先頭に、軍司令部の幕僚ばくりようや、旅団長などがはいつて来た。將軍は副官や軍参謀と、ちょうど何かの打ち合せのため、旅団長を尋ねて来ていたのだった。

「露探ろたんか？」

將軍はこう尋ねたまま、支那人の前に足を止めた。そうして彼等の裸姿はだかすがたへ、じつと鋭い眼を注いだ。後のちにある亜米利加人アメリカが、この有名な將軍の眼には、Monomaniaじみた所があると、無遠慮な批評を下した事がある。——そのモノメニアックな眼の色が、殊にこう云う場合には、気味の悪い輝きを加えるのだった。

旅団参謀は將軍に、ざつと事件の顛末てんまつを話した。が、將軍は思い出したように、時々うなず頷いて見せるばかりだった。

「この上はもうぶん擲なぐつてでも、白状させるほかはないのですが、——」

参謀がこう云いかけた時、將軍は地図ちずを持った手に、床ゆかの上にある支那靴を指ゆびさした。

「あの靴を壊こわして見給え。」

靴は見る見る底をまくられた。するとそこに縫いこまれた、四五枚の地図と秘密書類が、たちまちばらばらと床の上に落ちた。二人の支那人はそれを見ると、さすがに顔の色を失ってしまった。が、やはり押し黙ったまま、べいじやう剛情に敷瓦を見つめていた。

「そんな事だろうと思っていた。」

將軍は旅団長を顧みながら、得意そうに微笑を洩もらした。

「しかし靴とはまた考えたものですね。——おい、もうその連中れんじゆうには着物を着せてやれ。——こんな間牒かんちようは始めてです。」

「軍司令官閣下の炯眼けいがんには驚きました。」

旅団副官は旅団長へ、間牒の証拠品を渡しながら、愛嬌あいきようの好い笑顔を見せた。——
あたかも靴に目をつけたのは、將軍よりも彼自身が、先だった事も忘れたように。

「だが裸にしてもないとすれば、靴よりほかに隠せないじゃないか？」

將軍はまだ上機嫌だった。

「わしはすぐに靴と睨にらんだ。」

「どうもこの辺の住民はいけません。我々がここへ来た時も、日の丸の旗を出したのですが、その癖家の中を検しらべて見れば、大抵露西亞ロシアの旗を持っているのです。」

旅団長も何か浮き浮きしていた。

「つまり奸佞かんねい邪智じゃちなのじゃね。」

「そうです。煮ても焼いても食えないのです。」

こんな会話が続けている内、旅団参謀はまだ通訳と、二人の支那人を検べていた。それが急に田口一等卒へ、機嫌の悪い顔を向けると、吐はき出すようにこう命じた。

「おい歩兵！ この間牒はお前が掴つかまえて来たのだから、次手ついでにお前が殺して来い。」

二十分の後のち、村の南端の路ばたには、この二人の支那人が、互に辮髪べんぱつを結ばれたまま、枯柳かれやなぎの根がたに坐っていた。

田口一等卒は銃剣をつけると、まず辮髪を解き放した。それから銃を構えたまま、年下の男うしろの後に立った。が、彼等突殺す前に、殺すと云う事だけは告げたいと思つた。

「爾ニイ、——」

彼はそう云つて見たが、「殺す」と云う支那語を知らなかった。

「爾ニイ、殺すぞ！」

二人の支那人は云い合せたように、じろりと彼を振り返った。しかし驚いたけはいも見せず、それぎり別々の方角へ、何度も叩頭こうとうを続け出した。「故郷へ別れを告げているの

だ。」——田口一等卒は身構えながら、こうその叩頭を解釈した。

叩頭が一通り済んでしまうと、彼等は覺悟をきめたように、冷然と首をさし伸した。田口一等卒は銃をかざした。が、神妙な彼等を見ると、どうしても銃剣が突き刺せなかった。

「爾、殺すぞ！」

彼はやむを得ず繰返した。するとそこへ村の方から、馬に跨またがった騎兵が一人、蹄ひづめに砂すなほ埃こりを巻き揚げて来た。

「歩兵！」

騎兵は——近づいたのを見れば曹長そうちょうだった。それが二人の支那人を見ると、馬の歩みを緩ゆるめながら、傲然ごうぜんと彼に声をかけた。

「露探ろたんか？ 露探だろう。おれにも、一人斬らせてくれ。」

田口一等卒は苦笑くしょうした。

「何、二人とも上げます。」

「そうか？ それは氣前いきまへが好いな。」

騎兵は身輕に馬を下りた。そうして支那人うしろの後にまわると、腰の日本刀を抜き放した。

その時また村の方から、勇しい馬蹄ばていの響と共に、三人の将校が近づいて来た。騎兵はそれ

に頓着せず、まっ向に刀を振り上げた。が、まだその刀を下さない内に、三人の將校は悠々と、彼等の側へ通りかかった。軍司令官！騎兵は田口一等卒と一しよに、馬上の將軍を見上げながら、正しい拳手の礼をした。

「露探だな。」

將軍の眼には一瞬間、モノメニアの光が輝いた。

「斬れ！ 斬れ！」

騎兵は言下に刀をかざすと、一打に若い支那人を斬った。支那人の頭は躍るように、枯柳の根もとに転げ落ちた。血は見る見る黄ばんだ土に、大きい斑点を拡げ出した。

「よし。見事だ。」

將軍は愉快そうに頷きながら、それなり馬を歩ませて行つた。

騎兵は將軍を見送ると、血に染んだ刀を提げたまま、もう一人の支那人の後に立つた。その態度は將軍以上に、殺戮を喜ぶ気色があつた。「この×××らばおれにも殺せる。」

——田口一等卒はそう思いながら、枯柳の根もとに腰を下した。騎兵はまた刀を振り上げた。が、髯のある支那人は、黙然と首を伸ばしたぎり、睫毛一つ動かさなかつた。……將軍に従つた軍參謀の一人、——穂積中佐は鞍の上に、春寒の曠野を眺めて行つ

た。が、遠い枯木立や、路ばたに倒れた石敢当も、中佐の眼には映らなかつた。それは彼の頭には、一時愛読したスタンダールの言葉が、絶えず漂つて来るからだつた。

「私は勲章に埋つた人間を見ると、あれだけの勲章を手に入れるには、どのくらい×な事ばかりしたか、それが気になつて仕方がない。……」

——ふと気がつけば彼の馬は、ずっと將軍に遅れていた。中佐は軽い身震をすると、すぐに馬を急がせ出した。ちようど当り出した薄日の光に、飾緒の金をきらめかせながら。

三 陣中の芝居

明治三十八年五月四日の午後、阿吉牛堡に駐つていた、第×軍司令部では、午前招魂祭を行つた後、余興の演芸会を催す事になつた。会場は支那の村落に多い、野天の戲台を応用した、急拵の舞台の前に、天幕を張り渡したに過ぎなかつた。が、その蓆敷の会場には、もう一時の定刻前に、大勢の兵卒が集つていた。この薄汚いカアキイ服に、銃剣を下げた兵卒の群は、ほとんど看客と呼ぶのさえも、皮肉な感じを

起させるほど、みじめな看客に違いなかった。が、それだけまた彼等の顔に、晴れ晴れした微笑が漂っているのは、一層可憐な気がするのだった。

將軍を始め軍司令部や、兵站監部の將校たちは、外国の従軍武官たちと、その後の高い土地に、ずらりと椅子を並べていた。そこには參謀肩章だの、副官の襷だのが見えるだけでも、一般兵卒の看客席より、遙かに空氣が花やかだった。殊に外国の従軍武官は、愚物の名の高い一人でさえも、この花やかさを扶けるためには、軍司令官以上の効果があった。

將軍は今日も上機嫌だった。何か副官の一人と話しながら、時々番付を開いて見ている、——その眼にも始終日光のように、人懐こい微笑が浮んでいた。

その内に定刻の一時になった。桜の花や日の出をとり合せた、手際の好い幕の後では、何度か鳴りの悪い拍子木が響いた。と思うとその幕は、余興掛の少尉の手に、するすると一方へ引かれて行つた。

舞台は日本の室内だった。それが米屋の店だと云う事は、一隅に積まれた米俵が、わずかに暗示を与えていた。そこへ前垂掛けの米屋の主人が、「お鍋や、お鍋や」と手を打ちながら、彼自身よりも背の高い、銀杏返しの下女を呼び出して来た。それから、――

筋は話すにも足りない、一場の俄が始まった。

舞台の悪ふざけが加わる度に、蓆敷の上の看客からは、何度も笑声が立ち昇った。いや、その後の将校たちも、大部分は笑を浮べていた。が、俄はその笑と競うように、ますます滑稽を重ねて行つた。そうしてとうとうしまいには、越中、輝、一つの主人が、赤い湯もじ一つの下女と相撲をとり始める所になった。

笑声はさらに高まつた。兵站監部のある大尉などは、この滑稽を迎えるため、ほとんど拍手さえしようとした。ちようどその途端だった。突然烈しい叱咤の声は、湧き返っている笑の上へ、鞭を加えるように響き渡つた。

「何だ、その醜態は？ 幕を引け！ 幕を！」

声の主は將軍だった。將軍は太い軍刀の、手袋の両手を重ねたまま、厳然と舞台を睨んで居た。

幕引きの少尉は命令通り、呆氣にとられた役者たちの前へ、倉皇とさつきの幕を引いた。同時に蓆敷の看客も、かすかなどよめきの声のほかは、ひっそりと静まり返ってしまった。

外国の従軍武官たちと、一つ席にいた穂積中佐は、この沈黙を氣の毒に思つた。俄は勿

論彼の顔には、微笑さえも浮ばせなかった。しかし彼は看客の興味に、同情を持つだけの余裕はあった。では外国武官たちに、裸の相撲を見せても好いか？——そう云う体面を重ずるには、何年か歐洲に留学した彼は、余りに外国人を知り過ぎていた。

「どうしたのですか？」

フランス
仏蘭西の将校は驚いたように、穂積中佐をふりかえった。

「將軍が中止を命じたのです。」

「なぜ？」

「下品ですから、——將軍は下品な事は嫌いなのです。」

そう云う内にもう一度、舞台の拍子木が鳴り始めた。静まり返っていた兵卒たちは、この音に元氣を取り直したのか、そこから拍手を送り出した。穂積中佐もほつとしながら、彼の周囲を眺め廻した。周囲にい並んだ将校たちは、いずれも幾分か気兼ねそうに、舞台を見たり見なかったりしている、——その中にたった一人、やはり軍刀へ手をのせたまま、ちようど幕の開き出した舞台へ、じつと眼を注いでいた。

次の幕は前と反対に、人情がかった旧劇だった。舞台にはただ屏風のほかに、火のもった行燈が置いてあった。そこに頬骨の高い年増が一人、猪首の町人と酒を飲んでい

た。年増は時々金切声に、「若旦那」と相手の町人と呼んだ。そうして、——穂積中佐は舞台を見ずに、彼自身の記憶に浸り出した。柳盛座の二階の手すりには、十二三の少年が寄りかかっている。舞台には桜の釣り枝がある。火影の多い町の書割がある。その中に二銭の団洲と呼ばれた、和光の不破伴左衛門が、編笠を片手に見得をしている。少年は舞台に見入ったまま、ほとんど息さえもつこうとしない。彼にもそんな時代があつた。……

「余興やめ！ 幕を引かんか？ 幕！ 幕！」

將軍の声は爆弾のように、中佐の追憶を打ち砕いた。中佐は舞台へ眼を返した。舞台にはすでに狼狽した少尉が、幕と共に走っていた。その間にちらりと屏風の上へ、男女の帯の懸かっているのが見えた。

中佐は思わず苦笑した。「余興掛も気が利かなすぎる。男女の相撲さえ禁じている將軍が、濡れ場を黙って見ている筈がない。」——そんな事を考えながら、叱声の起った席を見ると、將軍はまだ不機嫌そうに、余興掛の一等主計と、何か問答を重ねていた。その時ふと中佐の耳は、口の悪い亜米利加の武官が、隣に坐った仏蘭西の武官へ、こう話しかける声を捉えた。

「將軍Nも樂じやない。軍司令官兼檢閱官だから、——」

やつと三幕目が始まったのは、それから十分の後だった。今度は木がはいっても、兵卒たちは拍手を送らなかつた。

「可哀そうに。監視されながら、芝居を見ているようだ。」——穗積中佐は憐むように、ほとんど大きな話声も立てない、カアキイ服の群を見渡した。

三幕目の舞台は黒幕の前に、柳の木が二三本立ててあつた。それはどこから伐つて来たか、生々しい實際の葉柳だった。そこに警部らしい髯だらけの男が、年の若い巡査をいじめていた。穗積中佐は番附の上へ、不審そうに眼を落した。すると番附には「ピストル強盜清水定吉、大川端捕物の場」と書いてあつた。

年の若い巡査は警部が去ると、大仰に天を仰ぎながら、長々と浩歎の独白を述べた。何でもその意味は長い間、ピストル強盜をつけ廻しているが、逮捕出来ないとか云うのだった。それから人影でも認めたのか、彼は相手に見つからないため、一まず大川の水の中へ姿を隠そうと決心した。そうして後の黒幕の外へ、頭からさきに這いこんでしまった。その恰好は鼯鼠眼に見ても、大川の水へ没するよりは、蚊帳へはいるのに適當していた。

空虚の舞台にはしばらくの間、波の音を思わせるらしい、大太鼓の音がするだけだった。と、たちまち一方から、盲人が一人歩いて来た。盲人は杖をつき立てながら、そのまま向うへはいろいろとする、——その途端に黒幕の外から、さっきの巡査が飛び出して来た。「ピストル強盗、清水定吉、御用だ！」——彼はそう叫ぶが早いか、いきなり盲人へ躍りかかった。盲人は咄嗟に身構えをした。と思うと眼がぱつちりあいた。「憾むらくは眼が小さ過ぎる。」——中佐は微笑を浮べながら、内心大人気ない批評を下した。

舞台では立ち廻りが始まっていた。ピストル強盗は渾名通り、ちゃんとピストルを用意していた。二発、三発、——ピストルは続けさまに火を吐いた。しかし巡査は勇敢に、とうとう偽目くらに縄をかけた。兵卒たちはさすがにどよめいた。が、彼等の間からは、やはり声一つかからなかった。

中佐は將軍へ眼をやった。將軍は今度も熱心に、じつと舞台を眺めていた。しかしその顔は以前よりも、遙かに柔しみを湛えていた。

そこへ舞台には一方から、署長とその部下とが駆けつけて来た。が、偽目くらと格闘中、ピストルの弾丸に中った巡査は、もう昏々と倒れていた。署長はすぐに活を入れた。その間に部下はいち早く、ピストル強盗の縄尻を捉えた。その後は署長と巡査との、旧劇

めいた愁歎場しゅうたんばになった。署長は昔の名奉行めいぶぎようのように、何か云い遺す事はないかと云う。巡査は故郷に母がある、と云う。署長はまた母の事は心配するな。何かそのほかにも末期まつごの際に、心遣りはないかと云う。巡査は何も云う事はない、ピストル強盜を捉えたのは、この上もない満足だと云う。

——その時ひっそりした場内に、三度將軍さんどの声が響いた。が、今度は叱声しっせいの代りに、深い感激の嘆声だった。

「偉い奴じゃ。それでこそ日本男児にっぽんだんじじゃ。」

穂積中佐はもう一度、そつと將軍へ眼を注いだ。すると日に焼けた將軍の頬ほおには、涙の痕あとが光っていた。「將軍は善人だ。」——中佐は軽い侮蔑ぶべつの中に、明るい好意をも感じ出した。

その時幕は悠々と、盛んな喝采かつさいを浴びながら、舞台の前に引かれて行った。穂積中佐はその機会に、ひとり椅子いすから立ち上ると、会場の外へ歩み去った。

三十分の後のち、中佐は紙巻を啣くわえながら、やはり同參謀の中村少佐なかむらと、村はずれの空地あきちを歩いていた。

「第×師団の余興は大成功だね。N閣下は非常に喜んでいられた。」

中村少佐はこう云う間も、カイゼル髭の端をひねっていた。

「第×師団の余興？ ああ、あのピストル強盗か？」

「ピストル強盗ばかりじゃない。閣下はあれから余興掛を呼んで、もう一幕臨時にやれと云われた。今度は赤垣源蔵だったがね。何と云うのかな、あれは？ 徳利の別れか？」

穂積中佐は微笑した眼に、広い野原を眺めまわした。もう高梁の青んだ土には、かすかに陽炎が動いていた。

「それもまた大成功さ。——」

中村少佐は話し続けた。

「閣下は今夜も七時から、第×師団の余興掛に、寄席的な事をやらせるそうだけ。」

「寄席的？ 落語でもやらせるのかね？」

「何、講談だそうさ。水戸黄門諸国めぐり——」

穂積中佐は苦笑した。が、相手は無頓着に、元気のよい口調を続けて行つた。

「閣下は水戸黄門が好きなのだそうさ。わしは人臣としては、水戸黄門と加藤清正とに、最も敬意を払っている。——そんな事を云っていられた。」

穂積中佐は返事をせずに、頭の上の空を見上げた。空には柳の枝の間に、細い雲母雲

が吹かれていた。中佐はほつと息を吐いた。

「春だね、いくら満洲でも。」

「内地はもう袷を着ているだろう。」

中村少佐は東京を思った。料理の上手な細君を思った。小学校へ行っている子供を思った。そうして——かすかに憂鬱になった。

「向うに杏が咲いている。」

穂積中佐は嬉しそうに、遠い土塀に簇った、赤い花の塊りを指した。Ecoute-moi, Madeline……—中佐の心にはいつのまにか、ユウゴオの歌が浮んでいた。

四 父と子と

大正七年十月のある夜、中村少将、——当時の軍参謀中村少佐は、西洋風の応接室に、火のついたハヴァナを啣えながら、ぼんやり安樂椅子によりかかっていた。

二十余年りの閑日月は、少将を愛すべき老人にしていた。殊に今夜は和服のせい、か、禿げ上った額のあたりや、肉のたるんだ口のまわりには、一層好人物じみた気色があつた。

少将は椅子の背に靠れたまま、ゆっくり周囲を眺め廻した。それから、——急にため息を洩らした。

室の壁にはどこを見ても、西洋の画の複製らしい、写真版の額が懸けてあつた。そのある物は窓に倚つた、寂しい少女の肖像だつた。またある物は糸杉の間に、太陽の見える風景だつた。それらは皆電燈の光に、この古めかしい応接室へ、何か妙に薄ら寒い、厳粛な空気を与えていた。が、その空気はどう云う訣か、少将には愉快でないらしかつた。

無言の何分かが過ぎ去つた後、突然少将は室外に、かすかなノックの音を聞いた。

「おはいり。」

その声と同時に室の中へは、大学の制服を着た青年が一人、背の高い姿を現した。青年は少将の前に立つと、そこにあつた椅子に手をやりながら、ぶつきらぼうにこう云つた。

「何か御用ですか？ お父さん。」

「うん。まあ、そこにおかけ。」

青年は素直に腰を下した。

「何です？」

少将は返事をするために、青年の胸の金鈕きんボタンへ、不審ふしんらしい眼をやった。

「今日は？」
きょう

「今日は河合かわいの——お父さんは御存知ないでしょう。——僕と同じ文科の学生です。河合の追悼会ついつうかいがあつたものですから、今帰つたばかりなのです。」

少将はちよいと頷うなずいた後のち、濃いハヴァナの煙を吐いた。それからやつと大儀たいぎそうに、肝か腎じんの用向きを話し始めた。

「この壁にある画えだね、これはお前が懸け換えたのかい？」

「ええ、まだ申し上げませんでした、今朝僕けさが懸け換えたのです。いけませんか？」

「いけなくはない。いけなくはないがね、N閣下の額だけは懸けて置きたい、と思う。」

「この中ですか？」

青年は思わず微笑した。

「この中へ懸けてはいけなにかね？」

「いけないと云う事ありませんが、——しかしそれは可笑おかしいでしょう。」

「肖像画しょうぞうがはあすこにもあるようじやないか？」

少将は炉ろの上の壁を指した。その壁には額縁の中に、五十何歳かのレムブランドが、悠

々と少将を見下していた。

「あれは別です。N將軍と一しよにはなりません。」

「そうか？　じゃ仕方がない。」

少将は容易に断念した。が、また葉巻の煙を吐きながら、静かにこう話を続けた。

「お前は、——と云うよりもお前の年輩のものは、閣下をどう思っているね？」

「別にどうも思つてはいません。まあ、偉い軍人でしょう。」

青年は老いた父の眼に、晩酌ばんしやくの酔よを感じていた。

「それは偉い軍人だがね、閣下はまた実に長者ちやうじゃらしい、人懐ひとなつこい性格も持つていら

れた。……」

少将はほとんど、感傷的に、將軍の逸話いつわを話し出した。それは日露戦役後、少将が那須野のの別荘に、將軍を訪れた時の事だった。その日別荘へ行つて見ると、將軍夫妻は今し方裏山へ散歩にお出かけになった、——そう云う別荘番の話だった。少将は案内を知っていたから、早速裏山へ出かける事にした。すると二三町行った所に、綿服まとを纏まとつた將軍が、夫人と一しよに佇たたずんでいた。少将はこの老夫妻と、しばらくの間立ち話あいだをした。が、將軍はいつまでたつても、そこを立ち去ろうとしなかった。「何かここに用でもおありですか

？」——こう少將が尋ねると、將軍は急に笑い出した。「実はね、今妻が憚りへ行きたいと云うものだから、わしたちについて来た学生たちが、場所を探しに行ってくれた所じや。」ちようど今頃、——もう路ばたに毬栗などが、転がっている時分だった。

少將は眼を細くしたまま、嬉しそうに独り微笑した。——そこへ色づいた林の中から、勢の好い中学生が、四五人同時に飛び出して来た。彼等は少將に頓着せず、將軍夫妻をとり囲むと、口々に彼等が夫人のために、見つけて来た場所を報告した。その上それぞれ自分の場所へ、夫人に来て貰うように、無邪気な競争さえ始めるのだった。「じやあなた方に籤を引いて貰おう。」——將軍はこう云ってから、もう一度少將に笑顔を見せた。

……

「それは罪のない話ですね。だが西洋人には聞かされないな。」

青年も笑わずにはいられなかった。

「まあそんな調子でね、十二三の中学生でも、N閣下と云いさえすれば、叔父さんのように懷いていたものだ。閣下はお前がたの思うように、決して一介の武弁じやない。」

少將は楽しそうに話し終ると、また炉の上のレムブランドを眺めた。

「あれもやはり人格者かい？」

「ええ、偉い画描きです。」

「N閣下などとはどうだろう？」

青年の顔には当惑の色が浮んだ。

「どうと云つても困りますが、——まあN將軍などよりも、僕等に近い気もちのある人で
す。」

「閣下のお前がたに遠いと云うのは？」

「何と云えば好いですか？——まあ、こんな点ですね、たとえば今日追悼会ついでうかいのあつた、
河合かわいと云う男などは、やはり自殺しているのです。が、自殺する前に——」

青年は真面目まじめに父の顔を見た。

「写真をとる余裕よゆうはなかったようです。」

今度は機嫌の好い少将の眼に、ちらりと当惑の色が浮んだ。

「写真をとつても好いじゃないか？ 最後の記念と云う意味もあるし、——」

「誰のためにですか？」

「誰と云う事もないが、——我々始めN閣下の最後の顔は見たいじゃないか？」

「それは少くともN將軍は、考うべき事ではないと思うのです。僕は將軍の自殺した気も

ちは、幾分わかるような気がします。しかし写真をとったのはわかりません。まさか死後その写真が、どこの店頭にも飾かざられる事を、——」

少将はほとんど、憤ふんぜん然と、青年の言葉を遮さへぎった。

「それは酷こくだ。閣下はそんな俗人じやない。徹頭徹尾至誠の人だ。」

しかし青年は不あい相かわ変らず、顔かお色いろも声も落着いていた。

「無論俗人じやなかったでしょう。至誠の人だった事も想像出来ます。ただその至誠が僕等には、どうもはっきりのみこめないのです。僕等より後のちの人間には、なおさら通じるとは思われません。……」

父と子とはしばらくの間あいだ、気まずい沈黙を続けていた。

「時代の違いだね。」

少将はやつとつけ加えた。

「ええ、まあ、——」

青年はこう云いかけたなり、ちよいと窓の外のはいに、耳を傾けるような眼つきになった。

「雨ですね。お父さん。」

「雨？」

少将は足を伸ばしたまま、嬉しそうに話頭を転換した。

「また楹^{マルメロ}棒が落ちなければいいが、……」

（大正十年十二月）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utyama

校正：かとうかおり

1999年1月12日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

将軍

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>